

SHOW HEYシネマルーム

★★★★★

ツーリスト

2010年・アメリカ映画
配給/ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント
103分

2011(平成23)年1月31日鑑賞

TOHOシネマズ梅田

Data

監督: フロリアン・ヘンケル・フォン・ドナースマルク

出演: アンジェリーナ・ジョリー/
ジョニー・デップ/ポール・
ベタニー/ティモシー・ダル
トン/スティーブン・バーコ
フ/ルーファス・シーウエル

👁️👁️ みどころ

シリアスな問題提起作もいいが、たまにはヒネリの効いた華やかで楽しい映画も。そんな要望に応じて、あくまで華やかなアンジェリーナ・ジョリーと意外とダサイ(?) ジョニー・デップが、水の都ヴェネチアを舞台に共演!

『シャレード』(63年)を彷彿させる中盤のおしゃれなサスペンスに注目だが、クライマックスに向けて遂に謎の犯人ピアースの登場! 誰もがそう思うはずだが、さてヒネリの効いた本作の結末は?

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■俳優良し、舞台良し、ヒネリ良し! ■□■

本作はアンジェリーナ・ジョリーとジョニー・デップの共演という話題のハリウッド大作でありながら、1時間43分と最近の映画にしてはコンパクト。それは『善き人のためのソナタ』(06年)、『シネマルーム14』208頁参照)という超問題作でアカデミー賞外国語映画賞をはじめ数々の賞を受賞したドイツ生まれのフロリアン・ヘンケル・フォン・ドナースマルク監督が、前作とは全く趣の異なる「楽しい映画」をつくりたいと考えたためだ。また、アンジーの『チェンジリング』(08年)、『シネマルーム22』51頁参照)での重厚な演技は印象深かったが、アンジーもそれとは全く違う「楽しい映画」にジャンルを広げたかったらしい。そんな2人の思惑が一致し、次にアンジーの相手役としてそんな「楽しい映画」に最もふさわしいハリウッドスターは? と考えた時、浮かびあがったのがジョニー・デップ。『パイレーツ・オブ・カリビアン』シリーズはかなりの大作だが、あのジャック・スパロウ船長のような雰囲気でもアンジーの相手役として「楽しい映画」を引っ張ってくれば・・・。

そんな素敵な二大俳優を起用した本作の舞台は、『ツーリスト』というタイトルにふさわしく、水の都ヴェネチア。まさに俳優良し、舞台良し、そして思わずオードリー・ヘップバーンとケーリー・グラントが共演したお洒落なサスペンス『シャレード』（63年）を彷彿させるような、ヒネリ良し。1時間43分というコンパクトな「ハリウッド大作」に今日は大満足。

■□■アンジーの華やかさに注目！この女が接触するのは？■□■

映画の華は女優。本作は映画冒頭からそれを見せつけてくれる。ドイツ人監督ドナースマルクが選んだ最初の舞台はパリだが、映画では『ピンクの豹』（63年）のクルーズ警部に代表されるように、パリ警察は犯人に出し抜かれるマスケが多い(?)と相場が決まっている。国際指名手配されている国際犯罪者の名はアレクサンダー・ピアース。今ホテルから外に出てカフェで朝食をとろうとしている女性エリーズ・クリフトン・ワード（アンジェリーナ・ジョリー）はピアースの恋人だから、エリーズをマークしていればいつかピアースと接触するはず。それがスコットランド・ヤードのジョン・アチソン警部（ポール・ベタニー）の思惑だった。そんな警部の読みどおり、朝食のテーブルに届いた一通の手紙を一読したエリーズはそれをすぐに燃やして席を立ったが、さて彼女の行き先は？

1950～60年代はマリリン・モンローのモンロー・ウォークが有名だったが、ドナースマルク監督は本作の冒頭、エレガントなドレスに身を包んだアンジーの「アンジー・ウォーク」をたっぷりを見せてくれる。これにはパリ警察の面々も思わず監視カメラをパンティ・ラインに設定し拡大する始末だが、これだからパリ警察はダメ？それはともかく、この雰囲気からするとエリーズはきっとこれからピアースに接触するはず。さあ、それをアチソン警部はパリ警察を通じていかに探知？

■□■エリーズは、なぜピアースの言いなりに？■□■

リヨン駅発、8時22分ヴェニス行き列車。これが序盤のキーワードだ。カフェでの朝食もそこそこに一人列車に乗り込み、「僕の体格に似た男を選んでそいつを僕だと思わせるんだ、愛してる」というピアースの指示を忠実に実行しようとしている中、パリ警察は手紙の燃えカスに化学処理を施した鑑識のお手柄によって、ヴェニスでエリーズとピアース(?)を待ち受けたが・・・。

朝食から列車への移動中に服を着替える時間がなかったのは残念だったが、その分、ホテルについてからのエリーズのゴージャスな着替えぶりに注目！かつてオードリー・ヘップバーンはその清楚な表情で世界中の男たちを魅了したが、実は服装も大きなポイントだった。そんなオードリーに対抗するかのよう、本作ではアンジーがさまざまな魅力的な衣装を見せてくれる。とりわけハイライトとなる舞踏会での黒のドレスに注目だが、逆に衣装だけに注意を奪われてはダメ。なぜ彼女は今、ピアースの言いなりに？ひょっとして

その裏には何かがあるのでは？そして、いくらお高くとまっていた（？）も、やっぱり女は女。その女心の本音は、さてどこに？そしてエリーズの正体は？

■□■ ジョニー・デップは、いかに平凡なツーリストを演出？ ■□■

若くして亡くなった大映の二枚目俳優・市川雷蔵はクールで端正な二枚目役がピタリだったが、同じ時代を駆け抜けた勝新太郎は、それとは対照的な「濃い演技」が特徴だった。ジョニー・デップと言えば『パイレーツ・オブ・カリビアン』シリーズや『チャーリーとチョコレート工場』（05年）（『シネマルーム9』112頁参照）などがあるのだが、彼の特徴は勝新太郎と同じような「これぞ、ジョニー・デップ！」という濃い演技。

そんなジョニー・デップが、本作の序盤から中盤そして終盤にかけて一貫して平凡なツーリスト、フランク・トゥーペロの役を淡々と（？）演じている。

■□■ こんな「非日常」なら誰だって・・・ ■□■

リヨンからヴェネチアに向かう列車に乗って一人小説を読んでいたのに、目の前に絶世の美女が現れたばかりか、目の前の席に座って話しかけ「食事に誘ってくれない？」と言われたら、どんな男でもそれに乗るのは当然。ましてや、ジョニー・デップ演ずるアメリカ人旅行者のフランクは3年前に妻を亡くした平凡な（？）数学教師だから、そんな体験もはじめてなら、ヴェネチアに着いた後最高級ホテルのスイートルームにクリフトン・ワード夫妻としてチェックインするのをはじめ。さらに、エリーズには恋人がおり、彼女がこのホテルに宿泊したのはその招待によるものだとわかりつつ、豪華なディナーの後ホテルのバルコニーでキスまでされると・・・？さすが名優ジョニー・デップ。平凡な数学教師には到底考えられない「非日常」の出現に戸惑いながらも、それに懸命についていこうとするフランクの役を静かに熱演している。

その一部始終をチェックしていたアチソン警部は、フランクがピアースではなく、ただのダサイ数学教師にすぎないとの確認を得ると、フランクを追及する興味を失ったが、エリーズへの執着を失わないフランクは以降もアチソン警部の目の前に「おジャマ虫」として登場することに。本作ではアンジーの華やかさに注目するとともに、終始ダサイ（？）ジョニー・デップにも注目！

■□■ 「水都大阪」の発展型がここに？ ■□■

橋下徹大阪府知事が推し進めてきた「水都大阪」構想は毎年着実に前進しており、さまざまなイベントにも人が集まり始めている。しかし、本作にみる水都ヴェネチアの華やかさに比べると、その魅力はせいぜい100分の1程度？プレスシートによると、『運河の街』ヴェネチアは、150ほどの運河によって形成された118の島々の上に作られた街で、それらの島をおよそ400の橋が結んでいる。また交通手段は舟か徒歩のみ。自動車

も、自転車すら乗り入れることが禁止されている」らしいから、不便と言えば不便だが、その不便さも観光の大きなポイントだ。

もっとも、ホテルやお店のすぐ目の前が運河だから、大雨で水位が上がれば大変。08年12月に起きた「水の都ベニス水没」のニュースには驚かされたものだ。大雨によって「アクア・アルタ」と呼ばれる高潮期で水深約1.5メートルを記録する、過去2年で最悪の水没状態となつたらしい。「水の都」は「水の都」なりにそんな悩みもあるが、本作では水都のヴェネチアは2人の主演俳優に並ぶほどの主役となっているから、その美しさに注目！「水都大阪」構想をさらに発展させればこのヴェネチア型に近づいていくのだろうが、そんな大胆な構想を立ち上げ実現していく政治家は今一体どこに？

■□■ピアースの罪は何？被害者は誰？ピアースの登場は？■□■

私は1950年代後半から60年代にかけてのオードリー・ヘップバーン主演の映画をほとんどすべて観ているが、中学生から高校生の頃、最高にスリリングで楽しかったヘップバーン主演の映画がケーリー・グラントと共演した『シャレード』。小学生時代から切手を収集していた私にとっては、隠匿された25万ドルをめぐる展開されるミステリーのラストに種明かしされるヒネリはとて興味深いものだった。しかして、金融犯罪者として警察から国際指名手配されているピアースの具体的なその犯罪事実とは？

それが大きなポイントだが、弁護士の私の目には、それが少し曖昧。どうも彼は、かつて仕えていたギャングの親玉レジナルド・ショー（スティーブン・バーコフ）を裏切り、ショーからまんまと23億ドルを盗み出したうえ姿をくramしたらしい。姿を変えるための整形手術に用意した費用だけでも莫大な金額らしいが、その被害者がギャングの親玉のショーなら警察は関係ないのでは？するとひょっとして、警察が迫及するのはピアースの脱税問題？ホントはそこらあたりをもっと迫及したいところだが、本作は問題提起作ではなく「楽しい映画」。したがって、そこは『シャレード』のスリルとサスペンスをおしゃれ心をもって楽しんだように、本作におけるピアースの犯罪ぶりもおしゃれ心をもって鑑賞しなければ。

映画はラストに向けてエリーズの本性が明らかにされる中、大きな緊張感をもってクライマックスに近づいていく。ひょっとして、エリーズの美しい顔もショーが手に持つナイフでズタズタに？特殊部隊の銃はショーたちに照準が定められていたが、この「捕り物」の目的はピアースを登場させ逮捕することだから、アチソン警部からの発射命令はまだまだ……。ジリジリする中で時は過ぎ、緊張感はピークに。さあ、ピアースはどんなタイミングで登場するの？そしてまた、本作のヒネリの効いた結末は何か？

2011（平成23）年2月1日記

坂和流『景観法』の出版はきっちりと！

1) 私は大言壮語するのは嫌いだ、適切なアナウンスと宣伝の必要性は認識している。しかも弁護士だから、書面に書くのはすべて証拠にもとづく事実のみ。そんな前提で私は2011年新年号の事務所だより第16号に「民事法研究会の実務法律全集の1冊として企画されているながら容易に筆が進まず、5年越しのテーマとなっていた『眺望・景観紛争をめぐる法と政策の新局面』(仮題)のすべての原稿が昨年11月に完成し、いよいよ今年3月発売されることに」と書いた。ところが、担当者の話によると「3月発売」は少し勇み足で、実際には7～8月だったらしい。

2) 同書には「景観法を軸とした」という冠をつける予定だが、そこからわかるとおり、同書出版の第1の動機は、04年6月に制定され05年6月に全面施行された景観法が定着し、全国で活用され始めたこと。とりわけ、07年3月に施行された京都市の「眺望景観創生条例」は画期的なものだ。また、芦屋市は市全域を「景観地区」に指定するという我が国初の大英断を下した。その他先進的自治体による景観法の活用は急ピッチだから、その紹介が不可欠だ。

3) 第2の動機は、景観事件の東西「両横綱判決」の誕生。景観利益を認めた02年12月の国立マンション事件1審判決は高裁で逆転したが、06年3月の最高裁判決は景観利益を認容した。他方

広島県の鞆の浦世界遺産訴訟では、08年2月に仮の差止めは却下されたが原告適格が認められ、09年10月には景観利益を認める1審判決が言い渡された。①景観利益をどう解釈？②その保護性の範囲は？③損害賠償と差止めのレベルの差は？など法的な検討点が多いが、この両判決の分析は不可欠だ。

3) 動機の第3は、小泉政権以降の観光立国政策の推進。10年までに訪日外国人旅行者を1000万人にするという目標は、その後の政権交代にもかかわらず、「新成長戦略」にもとづき20年までに2500万人、将来的に3000万人と拡張された。09年7月からは富裕層を対象とした個人観光査証(観光ビザ)解禁もあり、中国人観光客が押し寄せていたが、3.11東日本大震災によって状況は一変した。

4) 津波によって壊滅した被災地では、住宅の高台移転が不可欠。また廃棄物の処理や仮設住宅の建設が緊急課題だが、その用地は不足。他方、宮城県には日本三景の1つ「名勝・松島」があり、そこでは国宝級の景観を守るための厳しい法規制がある。そこで名勝・松島の「安全か景観か」「住宅再建か景観保全か」という問題が急浮上。さてその判断は？住宅や漁業の復旧・復興が急務の今、景観法は後回し？そんな「風評」に負けず、坂和流『景観法』の出版はきっちりと！

2011(平成23)年5月31日記